

『包括者存在』に於ける“Einteilung”の

意味の一般的究明と展望

川 口 光 勇

(一) 緒 言

本稿論文は、マスパースの主著の一つである「真理について」(Von der Wahrheit)の第一部「包括者の存在」を中心課題となす。

当主著は哲学的論理学の一部を為すものである。哲学論理学は「理性の自覚或は理性の機関」(VdW S. 19)と云われる。而してこの理性は「実存に由つてのみ実をもつ」(Vernunft und Existenz S. 48)のものであり、又それは「実存の道具」(Der philosophische Glaube S. 39)であるともいわれる。

マスパースの哲学的論理学は、論理学史的背景の上に立つてゐる。即ち一方では記号論理学、形式論理学、方法論の如き思惟の形式に関する論理学、特に「数学的論理計算」(VdW S. 80)の如き、又他方思惟の内容に関する所の形而上学或は存在論、思考の心理学、「超越的論理学」(VdW S. 80) 価値意識の非対象的存在前提を明瞭に現前化せしめるもの——はそれ自身の意義を所有してゐると認めてゐる。而してマスパースによれば「論理学の意味の多様性に於て、根源的なものと且つ包括的なものとしての全体を回復しよう」と云ふ事」(VdW S. 83)に自己の立場をとつてゐる。

マスパースの論理学に対する態度は、現在の人間の根源的覚知よりなされなければならないとし、それは「この途上」私の論理学が全体に於ける論理学の企劃を敢行する所の自覚である事を欲するであらう」(VdW S. 85)と。これは現代の論理学的状況の中に於て自己の哲学を確立する事にあると思う。恰もそれはカントが「allgemeine

dogie」に対して「transzendente dogie」を確立し（K.d.N.V. Vgl. S. 27 ff.）批判哲学を樹立した如く。

所でマスパーズ哲学の全貌を展望する事なくして、マスパーズ哲学を直観的に結論付ける事は無様に過ぎないので、本題に觸れる。

マスパーズは本書に於て、包括者存在の区分（論）を主題的に考察対象としておらないが、吾人は、包括者存在の空間解明には、この視点より考察する時、包括者存在の組織構造の関連の一側面を明瞭化出来ると思い、かかる見地より問題設定を為した。

（二） 包括者の組織

マスパーズによれば哲学とは存在の探究にある。而して存在としての存在は包括者（Das Umfassende）である。包括者は「対象でもなく、一つの地平に於て形態化された全体でもない所の存在」⁽¹⁾とも云われ、又「単に主観でもなく、単に客観的でもなく、却って主観——客観——分裂に於て両者の側へ存する所の存在」⁽²⁾とも云われる、反覆しているが、又「存在は全体に於て客観でも主観でもなく、却って、この分裂に於いて現象へ現われている所の包括者」⁽³⁾が存在しなければならぬと云う事は明らかである⁽⁴⁾とも云われる。包括者は本来的存在であり、根源的には一つの存在である。即ち「全一的包括者」——私がそれを包括者の内実と於て開明する為に努力せんとするや——包括者の諸様式の中へ分岐する⁽⁵⁾。即ち組織的には「包括者一般から我々である所の包括者と存在自身である所の包括者の分離」⁽⁶⁾、我々である所の包括者から我々がその現存在、意識一般、精神としてある所のその分離まで、内在者から超越者迄⁽⁷⁾、崩壊するもの（Auseinanderfallenden）から一般者迄（allgemein）である。この組織的分類は「ある原理からの強制的誘導を意味しないで、却って眼界に於ける出会いとか、又根源的にはそれに於て存在が我々に対して現代的となる所の諸様式を受取る事」（S. 50）を意味する。その組織は「根本経験（Grund—erfahrung）」（S. 50 ff.）に起因している。

包括者の諸様式は哲学する事に於て多様なものとして現われる。而してマスパーズは「これ迄、我々が開明の爲に求める所の七つの様式の他に、如何なる他の様式もあらわれない」（S. 58）と宣言している。しからば様式間の関係

は如何なる様態を示しているか云えば「包括者相互の關係は種かう類への關係として理解される事は出来ない。包括者の共通の介母は——實際一つの避け難い言語様式——包括者様式に於て凡ての共通なものの変化を目醒す爲に誘惑されてはならない。」包括者は成程共通なものに對する言葉である。つまり限界に於て出合うもの *Anteithese* と非対象的なものとしての言葉である。しかしそこそこ出合う所の一切のものは、直に自らの中で本質的區別となる (S. 27)。包括者様式の區別は「通過 *übergang*」なしに、單に一つの根源から他の根源への飛躍に於てのみ現われる (S. 28) 事即ち區別は包括的空間の間の飛躍の経験へ導くのである。従つて區別は「同種のものの比較を意味する」(S. 28) のではない。この事の説明に興味のある譬喩を挙げてゐるので、次に紹介する。即ち「諸々の區別は一つの平面に接觸しないで、却つて凡ての區別に於て一つの他の平面に於ける飛躍を生じる。それはパスカルに於ける枚な比較である。即ち私は決して点と云ふ部分を通しての線からはあらわれない。無限性はその間に横たわる。点は線よりも一つの他の秩序に屬する。点は何物も測定されない。そして点は線よりも長さについて等閑に附せられる事が出来る。正にそれは平面と線の間にあるし、又立体と平面との間にある」(S. 28) 枚なものである。従つて區別は「同種の區別の一系列ではなく、却つていつも二つの包括者の間の區別が本来的である」(S. 28) 即ち「超越者と内在の間のものである」(S. 28) これが包括者様式に於ける本質的分裂を論じてゐる (A)。

包括者様式の諸々の區別は「決定的なものではない」し又「最後のもの」として存在する事が出来ないものである。包括者の區別の真理は「その実行の経過に於て始めて現われる」諸關係は我々の特有な実行を通して現實的となる。それは「一者の情熱かう導かれる」(S. 28) 事であり「強烈なる一者 *Das überwältigende Eine*」(S. 28) を超越する働きを通して求めて行くことにある。「凡ゆる包括者の包括者たる一者へ超越者」(S. 28) の根源へ迫り行くことにある。それが哲學する事の運動である。組織分類は一つの根源への探究からものと出發したそのであり、組織的に分類化したものを固定化し対象化し得ない。マスバースは包括者哲學の方法論的根本命題として「包括者の開明は諸対象についての認識である事は出来ない」(S. 28) と云ふ事を挙げている事と軌を一にする。

(三) 存在の区分論

(A) 区分の意味の一般的究明

「包括看存在」の関明に重要な要素をもっていると思われ、この分論（マスパーヌ自身は区分論という名目で主題的には取上げてはならない）に焦点を合せ乍ら、マスパーヌの着書に則しつゝ、出来る限り彼の論旨の一貫性を求め、内的関聯の考察を試みる。

7. 存在の輪廓に於ける区分の意味

(a) 存在の区分に於て規準化された諸範疇

(1) 存在形態の諸様式

「区別され且つ区分される所のものは、思惟された存在 *Gedachtes* の一つの形態をもつ」（S. 193）所の存在の形態化は⁽⁸⁾、一別々に存続する現象として考えられるのが至当か、或は類型として考えられるのが至当であるのかの採式をもつ。諸類型は自己に於て明証化された関聯の諸全体であり、又構造的に理解ある形成物 *des Gebilde* である。そしてその諸現象は多かれ、少なかれ諸類型と適合する事なしに生じる。「存在自身でなく、却つてその形態の諸類型は斯様な意味に於て存在の区分 *Sinneseilung* の対象である（S. 193）とみなしている。

(2) 存在の形態化相互の関係

種々態々の存在の形態化の相互関係は三採に考えられる。結論のみを項目化すると「存在する所の一切のものは最後の類の下で *unter letzte Gattungen* 包括可能である」と云う観点と「存在する所の一切のものは、存在の場所や存在の領域や存在の地盤をもっている」と云う観点と「存在する所の一切のものは、全体の部分である」と云う小である。第一の観念に於て存在の形態化は種の種に対する如く相互に旅舞うのさなく、却つて最高存在が類推に由つて結びつけられている所の存在の類 *Gattungen des Seins* として相並んで横たわっているし、第二の観念に於ては、存在の形態化は作用範囲 *Spärren* であり、領域 *Gebiete* であり、支配 *Reiche* である。世界は世界の中に鎖なりし、それは精神的な作用範囲に於ける精神であるし、又世界の作用範囲に於ける世界存在であるし、第三の観念に於ては、存在の形態化は推積 *Schicht* として又段階 *Stufen* としての階層的秩序の中に重なり合っている。それらは上昇する秩序として相互の関係となる。諸々の段階はその系列に於て、全体の完成せる機関が、踏破する事に於て、獲得される道である。以上の如く各々の形態が説明化されている（vgl. S. 194）。

(3) 存在形態化の内幕

「区分された存在の内実」は世界であり、魂であり、我々の現存在の根本状態 *Grundverfassung* であり、価値であり、文化であり、乃至それは單に存在である (sein)。存在の根本的意味の徴表は具體的な諸様式を通して出会う所の存在者が考えられる。

(b) 存在の對象的な区分と包括者の超越する事の区別

「世界存在として生成されたもの *das zum Weltsein Gewordene*」(世界自身、現存在、精神) が区分されるかどうか或は超越する事に於て南明された包括者 *das erhellte Umgreifende* が、自らに於て区別されるかどうかは、区分する事の意味に於ける最も根本的な区別である (S. 94)。前者に於ては、認識可能な客觀の對象的な研究が問題であり、後者に於ては包括者の区別せる諸空間の非對象な区別が問題となる。

両者の区分様式向には一つの飛躍が存する。しかも両者の向には一つの恒常的關係がある。即ち世界存在の区分化は包括者の区別の解明としての媒体である。そしてその限界と不一致性を通してこれを見せる。又両者の区分の諸様式は一致しない面をもっている。例えば、生命と意識の間の飛躍は、客觀の探究に對して存立しているが、しかも包括的現存在の中には横たわっていない。即ち精神は科学の對象として、自己に於て意識一般の内容と諸理念を現わす事とを不分離に所鎖している。到る處「世界存在の強制化せる諸区分と包括者の諸区別との間の差異 *Abweichung*」は、包括者が對象的に明瞭に区別する区分を回避すると云う事が性格付けられる (S. 95) のである。

存在の對象的な区分は世界存在の客觀的な世界を又包括者の超越すべき区別は包括者の南明を求める。これを推然と混同してはならない。存在の区分を客觀し對象化するのではなく、「凡そを哲學的に区分する事は、包括者から感じられる。そして本來的に秀えられたものとしての包括者へ運せられる」(S. 96) と云われる如く前者に比して非對象的な世界が求められている。

(c) 区分することの目的

区分は多種多様の目的への媒体である。区分は使用する事に由つて始めてその意味を獲得する。

(1) 世界定位の知への媒体

「諸々の区分は探究の道具である」(S. 97)。或る物についての知に於て、諸々の事物が区別される。諸々の事物は存在の類の下で包括される乃至は存在の諸類型へのその接近と疎遠なものに従つて測定される。斯様に区分す

る事によって、私は存立するものとしての存在を考察し、又存立しているものの相在 (Sein) の多様性に於て受取り、意識された存在に於ける精密なる秩序への経験を構成する。

- (2) 明瞭な価値あるものと意欲への媒体 …………… (略)
- (3) 根源的なものの空間の知覚への媒体

区別する事は哲學する事に於て変化する。「凡ゆる区分は成程言表の媒体 Ausdrucksmittel となる事が出来るが、しかし乍ら意味は諸根源を明らかにす為には、空間開明 Raumerschließung である」(S/177)と云う如く、凡ゆる区分は空間の開明にその生命を託しているのである、それはとりもなおさず、包括者の諸空間の事である。

マスパースの使用している用語を邦語にすると極めて生硬な言語となるが、彼は「存在知に於ける固定化」「無交通の合理的な絶対性の慰安なき終局性」「言表し得る事の關係に於ける虚構的な選択要求」「正史的実存に於ける代りに」「自己存在と純理的な結果に關しての虚構的同一性」「合理的なものの凡ての袋路」(S/178)なるものは、諸根源からの充實を通しての「包括者の覺知に於てのみ」(S/177)超卓されると述べている。

(d) 区分の吟味

存在の諸々の区分は殆んど無限に多様性を示している。それ故我々にとつて最も重要な事は「区分の本質的な附加物の点 die wesentlichen Ansetzpunkte」(S/177)を見つけ出す事や「区分の真理」(S/177)と「区分の範圍 Sphäre」(S/177)を吟味する事が大切である。マスパースは「吾々が明瞭に思惟しようとする場合に、凡ゆる可能な区分の道を歩まねばならない」(S/177)と云っている事に於てその重要さの意圖がうかがわれる。区分の吟味に四つの問を發している。

① 区分は何に由つて關係されるか？

区分は「対象的に生成された存在 gewordenes Sein」(S/177)に關係されるか。乃至「包括者」(S/177)に關係されるかを吟味する事にあるとされている。前者に於ては「世界認識に對して考え出されるか、或は発見される所の区分」(S/177)が、後者に於てはそれに反して「全体的なものを考える所の哲學的に根源的な存在思惟に於ける区分」(S/177)が重要であるとされている。

② 区分は如何に広く及ぶか？ …………… (略)

③ 区分は如何なる本質的なものをもつか？

「区分の本質性は、我々の知に於ける区分を通して生起する所の中に横たわる」(S. 198)。且つ「区分の系列に於ける区分の實り多き事 *Fruchtbarkeit* はその *Reichung* の試金石である」(S. 198) としての「實り多き事は区分に由って実行される所の認識運動の中に横たわる」(S. 197)。事を意味する。

④ 包括者の区分の意味とは何か？

超越する所々の区分の吟味は如何なる客観化された基準をもたない。吟味は深究すべき知覚に於て生じる。深究は客観的実践的区分の媒体と共に生じる。知覚はこの様な媒体をとってそれを超えながら存在意識に於て経験されるものを通して生じる。

「包括者区分の吟味は哲学的伝統との關係に於て生じる」。(S. 199) と讀われる。更に其上包括者の思想は、哲学的伝統の告知に於て、又因襲的区分 *überkommene Unterteilung* との比較に於て見通す場合に、全く自己のものとなる。

「区分の吟味はその都度、存在知 *Seinwissen* からの獲得された所有 *Beitz* へ赴かねばならぬ」(S. 199)。斯様な展望を獲得した時始めて、新しい区分を創造すると称する思想は、實際、体系 *Systematik* に於て既に知られている。又歴史的伝統に於て既に過ぎ去つた道へ還帰すると云う蓋然性を考慮される。体系的展望は、その現実やその特性や真に新しいものを組織するために、我々の批判的に根取する事の輪廓をはつきりさせる。この様な体系的展望を多様な方法で獲得する。即ち範疇論や方法論や科学論に於て。この三方法論について、既にマースパースは D.W. の第一序文「哲學的論理學について」の IV. 哲學的論理學の構造と組織 *Bau und Gliederung der Philosophie. Methode logisch* に於て簡単に觸れている。即ち方法論は「各々の一定の確実性の限界を散える」(S. 27) のであり、範疇論は明瞭性に役立つ即ち「私は私が本来的に考える所のものに對しての私の意識一般を鋭敏にする」(S. 27) のであり、又科学論は「可能な知の法則についての内的概観に役立つ」(S. 27) ののであると規定している。ここでは我々は可能である様に深く侵入出来る。ここでは單に最も外的な体系的な要論 *Abwies* のみが、包括者の我々の開明を對比する場によって、より明瞭になす爲に、要論に依據する事に於て且つ習慣化された区分に狹隘に倚りかかる事に於いて与えられる (vgl. S. 197)。

2 区分の概観

凡この存在特徴 *Seinsmerkmale*、又作用論 *Spärentzungen*、又心理学的図式 *psychologische Schema*、又体系構造 *Typankonstruction* の如きは「単なる枯れたる屍体 *dun stetes Gerippe*」(S. 179)に過ぎないものである。そしてそれ等のものはその都度我々が対象として認識する所の存在から出て来るものと我々が認識し、行爲し、あらわす事によって、我々である所の精神としての存在から出て来る。いつもその都度包摂者の区分の全く他の意味を我々の存在意識として理解する爲に、その都度区分の眼界を明瞭にすると云う事を従つて必然性を洞察されると云う事と、凡この区分を相対的なものとして沈潜せしめると云う事が重要である。

2. 存在と存在の認識化

存在する一切のこの(事物と私自身)は自己に対して認識する事の対象となる事から出発する。マスパーヌは次の五命題を提起し、それに対して証明を爲している。即ち「存在の区分は諸対象を区分する、又世界の存在を区分する」(S. 200) 事と「精神の存在を区分する」(S. 200) 事と「認識する事は認識段階 *Erkenntnisstufen* に於て区分される」(S. 200) こと及び「全体に於ける存在は存在論 *Ontologie* に於ける対象となさしめる」(S. 200) ことと、「この總体的存在思惟は、カントがその超越的な方法をもつて実現した所の転向を通しての哲學することへの一つの段階となる」(S. 200)。

1. 世界存在の諸々の区分化

「対象的に認識可能な世界存在は段階に於て組立てる」(S. 200)。即ち、物質、生命、意識及び心、精神の四段階である。世界定位内で客観となる現実態であり、且つこれ等は現実的な対象性の異質的な諸様態であり、世界内に於てそれぞれ関連し合つてゐる諸々の世界として、存在するのである。

世界存在の区分化に対してマスパーヌはあらまし次の如き意味を述べてゐる。即ち世界存在の区分は凡ゆる経験的状态に關係し理解するのである。これは今日の經驗的な科學の總体性に横たわつてゐる全体に於ける存在に關係する、ある哲學的知の意欲の課題である。所で「世界存在に於ける段階と区分は、その研究可能性の諸構造であつて、存在自体についての根本的区分ではない」(S. 200)のである。

即ち「物質は、その根本形態に於ける有機的生命を諸要素の中へ、自らを分離する。心は自己に於て、根本能力を

区別せしめる。精神は、自己に於て認識段階を区別せしめる（fig. 201）。マスパースはこの四重の諸状態についての概念規定は当看書では取扱つておかない。

凡ゆる存在の場所としての精神の区分を通しての存在の区分に於て、原理となる所の世界存在の区分の途上で既に告知されている両者の窮極的な区分の正しさが、簡単に回想されるべきであると云う意味の事を述べている（fig. 201）

(2) 精神的能力の区分

マスパースは精神能力の区分を、彼の哲學史的展望のもとに列記している。魂の区分は既にプラトンが区別した。

即ち *Logistikon* (*Dorben*) と *thymoeides* (*Mutmaßigkeit*) と *epithymetikon* (*Begehrde*) を靈魂の三分説として、アリストテレスは *Logistikon* と *Sensitivum* と *Begehrde* と *Motorische* を区別し且つ精神を外部から人間の中へ歩みせしめた（fig. 202）アウグスティンは *Gradatius* と *Wille* を区別した。11、デカルトは無意識的な有機的生起から意識されたものと単に空間に於ける力學的な生起の様式としてのみあるものを区別した。十八世紀に於ては *Dorben* と *Ficklen* と *Wissen* とを区別した（fig. 203）しかし下ら「この様な諸区分は曖昧である（fig. 204）」と批判している。それは諸区分が本来的に關係する所のものが、不明瞭のまま留まつていて、又全く区別は諸区分に於て考えられる。各々は確かに真理を含有している「しかし乍ら我々の知に於ける心理学の場所、今日迄斯様な区分の意味を占めては不明瞭である（fig. 205）」この様な困惑の流れの中で次の如く区別している。それを項目化すると (aa) 経験的研究の一領域と (bb) 我々に対しての価値の先驗的先天性 *transcendentales Apriori* の内明乃至意識一般 (cc) 我々である所の他の包括者の内明 (fig. 206) のそれである。

(3) 認識段階の区分

存在する所のものは、認識に於て接近し難いものとなる。この事は謂わば「自己確信の概」(fig. 207) である。認識する事の唯一絶対なるものは存在しない、むしろ数多くの様式が存在する。「これらは包括され且つ上昇的段階に於て秩序付けられる（fig. 208）」のである。それは凡ての教えを洞察する為に、歩み去らねばならない哲學史の一つの広い領域である。マスパースは、ガントの段階は *Anschauung, Reflexion, Vernunft* となり (d)、アウグスティンは *anima, spiritus, mens, ratio, intellectus* の段階をとっていると考えられている (fig. 209)。「斯様な諸系列はそこに於て、現われない所の如何なる哲學者も存しない（fig. 210）」のであり、共同的なものは更に特徴づけられる。次下でマスパース

の主張点を簡略化して記する。即ち

(aa) 「直観的なもの Anschaulichen (Intuitiven)」と思维されたもの Gedachten (Rationalen) の根本対立は、凡てを通して生じる (S. 202)

(bb) 「根本対立は認識段階を特徴付ける為には心的能力としての表現となる (S. 202)。認識することは一つの心的現実であり、その能力として考えられるが、却ってそれは「時間的形態に於ける永遠なる認識の存立として存する (S. 202)」と考えられている。それ故認識段階に於ては「経験的直観 (S. 202)」として観察するのでなく、却って「無時間性から存在の実現化される公明化と洞察と妥当的存在が問題である (S. 202)」

(cc) それは常に認識段階の系列が区別される程、その認識段階の系列は「一つの階層的環の中に上昇する (S. 202)」。凡てのものは「単なる感覚的知覚と悟性の思维よりもより以上の認識に於て認識する (S. 202)」それはプラトンの「理念の観想 (das Schauen der Idee)」であり、エッケハルトの「理性を把握するよりも尚、より高次のものが存在する事を認める所の理性」やスピノザの「事物を永恒の相下で und qualem specie aeternitatis (E) やカントの「無限性の中へ与えらるべき諸々の理念の方向の能力としての理性」(各々 S. 202)

(dd) 「存在の真理は自己自身を通して現在のである (S. 202)」その「段階は如何なる由来をもたないで、却って根源である (S. 202)」

并「認識能力はいわば存在様式 (S. 202)」である。認識する事は「外的把握 (S. 202)」でなく「単なる把握可能の内的制約 (S. 202)」を示している。認識する事は「段階を通して固有の存在の発展を探究する (S. 202)」これは我々が見出す事が可能な現象と共に成長する「認識段階はこの生成の一種の表現 (S. 202)」であると認めている。切て右のような認識段階説の諸命題は、それ自身絶対的で内容に充ちているが、しかしマスパーズにとつては、それ等は「我々は認識様式の統体と認識段階を一義的に且つ普遍的に見渡す事が出来ない (S. 203)」且つ認識様式の一区分は「存在の一つの満足すべき区別とはならないで、存在の自らに於て閉鎖された区分となるのである (S. 203)」と批判している。以上の認識段階説の区分は、存在の区分を与える事は出来ないと云う事に他ならない。

(4) 存在論

以上收束せし「世界存在と變の能力と認識段階の諸々の区分は特殊的な区分として現象する (S. 203)」ものである。それらは、いずれも「超越者の思想と神學を欠いた (S. 203)」ものであり、「神性の認識は存在論の偉大な根本方向

の特有な領域としての宇宙論 *Kosmologie* と心理学 *Psychologie* と並んで千年間貫いて存している (*§ 203*) のである。凡てこの領域は、存在論を理解するのであるうし且つ凡ては把握し乍ら、存在としての存在を区分するのである。

所でこの領域自身は「凡て特有な存在秩序をもつ、そのもとで又神学の存在秩序をもつ (*§ 203*) のである。証史的に与えられた哲学を觀察する時に、我々は存在論の多様性を発見する。即ち存在は屬性をもった実体であるとか、事物存在であるとか、弁証法的発展に於ける自我存在であるとか、以上のような存在の根本的諸形態は「思惟に對して一つの他の様式に既溺する (*§ 204*)」のであり、又それは「もつとも純粹なもつとも非直観的な思惟に於ける、もつとも形式的な存在規定を与える (*§ 205*)」に過ぎないものである。

しからば一体この諸論は本来何に何を意味するか、と云えば「我々はそれらの論について一つの根本経験をなす (*§ 206*)」即ちこれらの論は「一つの死骸 (*§ 207*)」のようなものである。而して「諸々の思想は存在の構造であるが、或物についてこの知ははなく、却つて実存的な告知に對しての諸々の可能性である (*§ 208*)」。この「諸々の思想は、それが言語として使用する現實を通してのみ真理である (*§ 209*)」従つて諸々の思想が、これをもつならば、固有の根源から区分された存在意識を通して、それを超越する事にある。

結局諸々の思想は「存在の暗号文字 (*§ 210*)」となる。

「暗号文字としての根源的な諸々の存在構造は形而上等と称される (*§ 211*)」し、「その形態の知に於て奪われ且つ散え *Verstreut* となる所の諸構造は存在論と称される (*§ 212*)」。包括者の根本思想は、この存在論を超えて「一つの解決すべき、しかも同時に保持すべき作用 (*§ 213*)」を實現する。根本思想は「暗号文字の總体に於て一つの包括すべき範疇論に於て自己のこのとなす (*§ 214*)」従つて「存在論は最早や存在自身の一つの知ではなく、諸範疇論」として、存在はその中で對象的に考へられる所の様式と形式についての知である (*§ 215*) と称している。

(5) 「世界存在の区分から包括的存在論に迄の存在の根本特質の凡ゆる様式は對象的なものに於て運動する (*§ 216*)」。この存在知の如何はカントによつて行われ、いとマスパスは見えている。「彼の先驗的方法は認識する事や直観する事に対する又正當なる行為としての對象存在の可能性を意識一般に於て与えられた運動の中で闡明する (*§ 217*)」。意識一般の包括者は、認識すること、洞見すること、行為を在当せしめるものに於て、先天的に明瞭となる。「カントは人間の心情の能力について語る場合、心理學的能力でもなく、認識段階を考へるのでなく、却つて時間的に於て我々の意識一般を通しての認識の包括者に於けるこの前提が考へられる (*§ 218*)」。

β. 凡ゆる存在の場所としての精神

「現在の総体は、もっとも広い意味に於て精神と称される。精神の一つの区分はそれ故、凡ゆる存在の一つの個有の様式により包括される (S. 206)。」

存在の考察に対しては、世界存在から始められ、ここでは人間精神に由つて、現出されたものの総体としての文化から始める。以下項目化すると、

α. 文化領域

α. 精神の歴史的形式

aa 特有な歴史的文化形態に於ける原理は例へばヘーゲルを理解せしむる。

bb 単独的人間集団の本質は性格は、性格心理学と国民心理学と種族心理学に於いて一般的に言表される事を求められる。

β. 精神へ精神論についての一般的な知

aa 妥当的な諸範疇 bb 自己内明の諸範疇 cc 意識の主観——客観分裂に於ける諸範疇へ諸対象へ思惟可能、

美的・神秘的・精神の能動性・形態の範囲へ人格的・共目的」 dd 歴史の諸範疇

ε. 「精神についての凡ゆる知から、精神がそこからとして、その中に生さ且つ現われる所の存在の深さへの疑問

が、包括者の哲学に由つて生じる」 (S. 207) (説明略)

II 存在の総体像

「各々の区分は、一つの全景を欲する。交錯する全景 durchkreuzende Totalansicht の系列は、一切のものが、それに於て出合う所の統一への問を呼出す。我々は単にその都度区別に於ける統一のみを求めるのではなく、却つて又区別の様式の数多性に關連する所の統一を求める」 (S. 211) のであると云われる。

全景の一つは凡ての他のものを自己に対して、その場所に於て、分類する所の現実的に全体的なものとして求められる。それに由つて「吾人は一つの全体的なものの輪廓 Gesamtumriss を与える」 (S. 211) がしかし、それは「如何なる方法でも確信的には成功されない」 (S. 211)。

全景の形式は展開であるか、或は永遠に現在的な存在状態の秩序についての交互に組合わされた存在かである。斯様に全体に於ける存在の展開が、眼前にもたされる一つの輪廓に於て「世界過程の」凡ての全体的生起から統一を求

めたか、或はロゴスの全体性に於ける真理の凡てを包括する時間領域と云う現在性の根本原則としての統一を求めたし、そしてロゴスの全体性は我々の認識段階の全体に於て、現象にまで現われる (Vgl. S. 17)。

哲學的意識化の始めに於て、一切のものが、哲學的意識化に於て表象され分離される。斯様に「世界開闢論」(Kosmogonie)や神統記 (Theogonie) や人類發生論 (Anthropogonie) によって考えられた所ものは、後日の諸区分を区別した所の一切のものを、萌芽の中に含む (S. 15/16)。世界生成の輪廓は、哲學的意識に於ける一切のこののである。即ちそれは、世界の事實的過程であり、意識の展開であり、先驗的生成の暗号であり、又公明化の行爲に於ける一つの連続である。又公明化の行爲に於て、世界存在としての存在は、それが生起された存在に人間に対して立向うのである。

(a) 世界開闢論的、歴史的、先驗的世界全体

こゝでは「存在全体は世界全体として考えられる (S. 15)」。この「世界全体の一つの像は、三つの方法で考察される (S. 15)」。それは「状態の一系列に於ける世界自身の生成として世界開闢論的に考察される」その出発点は、世界存在が、世界に於ける世界自身の生成として「人間に於ける世界意識の生成として」歴史的に「一出发点は、世界存在が世界に於ける我々である」と思う思想である。又「存在意識の可能性の無時間的な発展として」超越的に「二出发点は、永遠的形式に於ける凡ての存在は無時間的に、現在的に意識される事が出来ると云う思想である」(S. 16)。ヤスパーは、全体が、それに於て像となる所の三方向、即ち世界開闢論、と歴史的なもの、と超越的なものを、包括的に取扱っている。

(b) 人間存在

可能的存在としての人間が、世界を現象を見、その世界を超越する事が世界に対する人間乃至世界存在に対する人間存在の本質に与つた向を提示し、それに対する答を通して語られている。

所で、ヤスパーは、世界に於て認識されたものを存在自身と考えたり、世界の無限性を把握するとかえたり、又私自身を世界として認識されたものから導く事を欲する様な場合に「私は世界の中で道に迷ふ (S. 17)」と述べている。斯様な見地に立つて見る時に「凡ゆる段階と世界存在の諸区分は、もはや存在自身と全体に於ける存在の諸々の区別ではない」(S. 17)。

(C) 凡ゆる包括者に於ける一者

根本分裂は、科学に直接に役立つ客観的、存在、輪廓の多様性と凡ゆる存在の背景——我々に対して感じせしむる所——の包括者の、明瞭との間に依然として存する。客観的諸区分は包括者からは導出されないが、しかし乍らその多様性と一なるものに於ける包括者の諸様式が多様である客観的、存在、輪廓へ身を持つる様に、それは向わるべきである。

此事は次の如く公式化される。即ち「存在の凡ゆる区分は、包括者の明瞭から、その本来的意味とその眼界立てを経験するが、しかしそれに対して固有の知の中で知られたものの同一の知を理解するのではなく、却ってその知の充実に通して経験する」(S. 28)。

客観的存在輪廓は一なるものを知るのに、知が包括者の意識に於て保持される限り、知として常に複数的に留まる。「一なるものは知的内容ではなく、却って充実に於ける一者である」(S. 28)「存在の全一的、眞の総体像は存しない。包括者の思惟は、一者を通しての充実を解放するであろう。又充実は、一者からの知を通して代置し且つ枯渇されないものである」(S. 28)。

この充実に基づいて、我々は虚偽的総体像の代りに、却って包括者に於ける所屬するものの唯一の富としてのみ現前化する。

- (1) 如何にして分離されたものは謂わば、凡ゆる包括者を通して、横ざって貫いているか？……(略)
- (2) ひとつも鋭い歯が又何処かで如何に脆弱になるか？

我々が客観化し乍ら実現する所の諸分離は、明瞭化の諸制限を事象自体の存在に於て制限される「諸分離は、前景的区分から深さの中へ逆歩む」(S. 29)。やはり、凡ゆる分離は単に一つの視点の下に於てのみ生じる、又相對的に妥当するが、しかし絕對的ではない」(S. 29)。(注)それは一者への指示が内に感されているが故である。

「空間的、生起 *raumliche Gestalten* から「有機的生命の」と意識の内的存在 *innerlichsein des Bewusstseins* からの区別は、根本的な——探究可能に於て——生成的世界存在である」(S. 29)。(注)若しこれを無視する時、知の混乱の中に導く事になる。この事を更に具象化すると論理学と心理学との関連である。即ち「論理学と心理学との間の鋭い分離は、経験的研究の如き論理的意識の明瞭に対しての制約である」(S. 30)。(注)前者は「命題の価値関連に関する又諸根拠や諸経過に関する知であり、又明証的な意味に関する無時間的な状態に変化する」(S. 30)。(注)後者は「心的体験とその根源に關する時間的生起に変化する」(S. 30)。(注)ものである。しかし「この分離は、包括者の凡ゆる過云的なものに於

く脆弱となる(そのもの)。それは「斯尔なものとして心理学的に研究す能ではなく、意識された命題に於て、論理的に強制的に知り得るものではなく、又経験的実在性をもなく、無時時的意味をもなく、却つて両者を充つものである」(S. 220)。心理学と論理学は、分裂されないで、却つて両者は、対象的に把握されないものに基づいてゐるものを雑然と用いられるの前論理性への洞察の一式である。これは直に現実的であり且つ感覺的である、或はこれは一方でも又他方をもなく、しかしそれ自身直に我々に対する知覚に於て、その区別は論理学的にも、心理学的にも基礎付けられない所の包括者の様式の中へ組織される(そのもの)。「非対象的包括者のこの諸々の区別は、それに反して如何なる絶対的なものであるなく、却つて……区別は……一者を指示する」(S. 220)。

包括者を通しての充実は、私が分離を絶対化し、凡そを支配的に且つ非他地的である存在知として、諸分離に対して崩壊する事について、身を守る。

(3) 衝突と不一致性が、如何にして包括者の深さの中にその究極的な意味をもつか？

世界存在に於て、又精神に於て到る処、我々は対立 *Gegensatz*、両極性 *Polarität*、矛盾 *Widerspruch* 等の否定的側面を観察する。それは「存在する所の一切のものが、始めてそれに於て存在を獲得する運動である」(S. 220)。我々は「この対立を虚構的な現実性として或は感覺的に十全な *Sinnadäquanz* 了解可能性として把握する」(S. 220)。「存在の凡ゆる区別は、單に調和的のみに順次に *aufeinander* 関係しないで、却つて相互に *gegeneinander* 一致せずに緊張 *Spannung* と斗争 *Kampf* の中に立つてゐる所の或物を示す」(S. 220)。而して「究極的な衝突は決して一義的な明瞭性に於て意識されない」と云ふ事と、又究極的なものは、一者が凡そこの背後に存立する限り於て、究極的なものである」と云ふ事である(そのもの)。

では、不一致性は何故存在するのであろうか、それは「不一致性は我々の現存在の原現象 *Ursphänomen* である。即ち分裂が統一に對して立つてゐるが故に、そして分裂が統一に對して立つてゐる限り、不一致性が現存する」(S. 220)。

包括者からの嚮導のみが、有限な情熱の絶望性を越えて、斗争と不一致性を、深さの中へ導く事が出来る。即ち斗争の最悪の場合からの人間を、正に究極的なものに於て結合すると云ふ事とか、衝突からの人間を包括者の適合

Korrespondenz の中へとたらしめず事とか、生と死への担当 *Umsatz* からの人間を、本来的交通に目醒せしめ事等の諸可能性をとつて、深さからは尚お全体的な本質の飛翔の斗争に於て生じるのである。(Vgl. S. 220/221)

(4) 如何にして時間性に於て道が恰も根源的な一者から凡ゆる分裂に於ける関連としての一者へ赴くか？

「時間に於て明瞭性は、單に我々が爲す所の諸区分を通して、又我々が経験する所の諸分裂を通してのみ、我々に対して目醒める」(S. 320)。我々は分裂される存在に於て我々を見出す。又我々は諸分裂や諸区分を極端に追いつめるが、しかしそれに於て、「我々は凡ゆる分裂と区分に於て関連し、且つ本来的存在である所のものとしての統一を突進む」(S. 321)のである。マスパー스의表現を用いて現わすと、我々は「分割する事」*Unterscheidung*と「自己を組織化する事」*Selbstgliederung*と「分離する事」*Absonderung*と「和解する事」*Wiedervereinigung*や「孤立化する事」*Isolierung* からの突破と、その還帰の段階へ、凡ゆる精神的な過程を見出す所の、この分裂の研究的解明は無限の果進的な運動をたかめる。そしてこの研究的解明が、その中で「生起する所の包括者の導きの事で内実を獲得する」(S. 322)。しかしそれはクライスプロツイスの如何なる調和的な完成を得た事にはならない。即ち「時間的現存在に於て明白となる所のものは包括者の導きのことに立脚するが、しかし知り得る調和的な解決の特性をとらない」(S. 322)のものであり、それは「一者の無限の探索であつて、時間」に於ける所有ではないのである。(S. 323)。

結 語

区分論(諸根源を明らかにする所の包括者の空間的明にある)は、マスパー스의包括者存在論 *Being-Ontologie* の確立の爲の方法論の一つである。

形大な且つ難解なこの看書には、未だ翻訳書や注解書がないので、形式的且皮相的な理解にさへ困難を感じているが、幸い斎藤武天教授の諸論文で展開されている。根本原典を手懸りとして解明を試みたに過ぎない。

○引用書

1. Jaspers. *Vernunft und Existenz* S. 35
2. Jaspers. *Die philosophische Glaube* S. 143f
3. Jaspers. *Einführung in der Philosophie* S. 30
4. Jaspers. *Vom der Wahrheit* S. 7 以下頁数のみ記しているのは、この書を示す。

A. 斎藤武雄教授「マスパーズにおける超越者の位置」結語——批判的考察ニ。頁5二—頁参照。……各諸様式の關係

について。

B. Taggers. *Nat. W. Syst.* に存在の形態化として次の事を記している。例え、固定せる、不可分の形成されたものとしての要素として、又無意識的に刺激する根源の生起するものとしての諸々の権力として、又凡てを貫徹する全体性とその了解可能な根柢としての諸原理として、個有の包括する性格の本性性としての諸々の権力として、又包括者の諸空間としての諸形態の如く。

C. アリストテレスの靈魂論に対して、フオーレンダーは次の如く述べている。「心理学は生命的諸活動の論である。靈魂とは、今や彼にとっては單に生命の原理を意味するに過ぎない。……アリストテレスの功績は……心理学的事実を綿密に記載し、分類し、説明し、之に依つて、經驗的心理学の確立者となつた事に存する。靈魂の原理と亦最底の段階より最高のそれまで發展する……」(西洋哲学史(一) 邦訳三三頁引用)。靈魂の区分は心理学の対象と云う事。

D. Kant, *Kritik der reinen Vernunft* (Von Dr. Felix Gross)

Alle unsere Erkenntnisse hebt von den Sinnen an, geht von den ganz Verstande und endigt bei der Vernunft (Kantの先驗的并証論の理性一般の項引用)。マスパーズ自身の引用ではない。

E. スピノザ「倫理学」の中に「第四十四、事物を偶然としてでなく必然として觀察することは理性の思惟の性質に屬す。の系二、事物永遠の相の下で知覚することは理性の性質に屬する」(邦訳スピノザ全集Ⅱ 二〇六、二〇九頁引用)